

日本英文学会東北支部

第 81 回大会資料

共催：国立大学法人 秋田大学 教育文化学部

秋田英語英文学会

時：2026 年 12 月 5 日（土）

所：秋田大学 教育文化学部 3 号館
（秋田市手形学園町 1 番 1 号）

日本英文学会東北支部事務局

〒990-8560 山形県山形市小白川町一丁目 4-12

山形大学 教育学部 三枝和彦研究室内

電話：023-628-4827／E-mail：tohoku@elsj.org

第 81 回大会交流会・情報交換会のご案内

第 81 回大会交流会・情報交換会を下記の通り開催いたします。お申し込みにつきましては、9 月下旬に支部会員宛に別途ご案内申し上げます。なお、参加をご希望の方は必ず事前にお申し込みください。

【日時】 2026 年 12 月 5 日（土）午後 7 時～9 時

【場所】 茜屋 秋田駅前店（秋田県秋田市千秋久保田町 3-15 三宅ビル 2F）

日 本 英 文 学 会 東 北 支 部

2026 年度 大会役員一覧

（敬称略・五十音順）

支 部 長 大 貫 隆 史

副 支 部 長 福 士 航

理 事 井 出 達 郎 大 貫 隆 史 川 田 潤

木 村 宣 美 三 枝 和 彦 酒 井 祐 輔

境 野 直 樹 佐 々 木 和 貴 島 越 郎

高 田 英 和 福 士 航

大 会 準 備 委 員 高 田 英 和 土 屋 陽 子 中 谷 紘 子

中 村 太 一 柳 澤 國 雄

開 催 校 委 員 大 西 洋 一

事 務 局 三 枝 和 彦（事務局長） 齋 藤 章 吾（事務局長補佐）

佐 藤 元 樹（事務局員）

日本英文学会東北支部第 81 回大会プログラム

共催：国立大学法人 秋田大学 教育文化学部

秋田英語英文学会

時：2026 年 12 月 5 日（土）

所：秋田大学 教育文化学部 3 号館

（秋田市手形学園町 1 番 1 号）

理事会 11 時 00 分より（1 階 講義室 150）

開会式 12 時 30 分より（2 階 講義室 255）

□開会の辞・支部長談話

日本英文学会東北支部長 大 貫 隆 史

□東北英文学賞（奨励賞）授賞式

受賞者（英文学分野） 酒 井 祐 輔

研究発表

第 1 発表 13:00 － 13:30 第 2 発表 13:30 － 14:00 第 3 発表 14:05 － 14:35

第 4 発表 14:35 － 15:05 第 5 発表 15:10 － 15:40

文学部門（2 階 講義室 255）

司会 岩手大学講師 中 谷 紘 子

1. ヴァージニア・ウルフ『波』における形式の解体

東北大学大学院 佐藤 優里奈

司会 福島大学教授 高 田 英 和

2. Kazuo Ishiguro の *Klara and the Sun* における語りと世界観の特異性について

東北大学大学院 藤 原 史 織

3. 壊れた信頼のあとで——*In Cold Blood* における声・応答・記憶

群馬バース大学准教授 徳 永 慎 也

司会 秋田大学名誉教授 佐々木 和 貴

4. いつか、どこかの日本：

観光産業からみるアラン・ブース *The Roads to Sata* における「日本」表象

八戸工業高等専門学校教授 菊 池 秋 夫

5. 冷戦リベラリズムを巻き戻す——ホブソン、フォースター、トリリング

宮城学院女子大学准教授 酒井 祐輔

英語学・英語教育部門（2階 講義室 254）

司会 旭川医科大学講師 柳澤 國雄

1. 日本語否定一致表現における「文断片」の分析

東北大学大学院 倉田 知温

2. 格与値によるボックス化

東北大学大学院 熊谷 陽希

司会 東北大学准教授 中村 太一

3. 心理動詞と Box 理論

福井大学講師 廣川 貴朗
アリゾナ大学客員研究員 菅野 悟

4. 関係副詞 why の疑問縮約

福島大学准教授 佐藤 元樹

5. 発表なし

SYMPOSIA（15:45 – 18:00）

文学部門（2階 講義室 255）

英米文学作品にみられる他者への共感

司会・講師	弘前大学准教授	土屋 陽子
講師	共立女子大学教授	浦野 郁
講師	慶應義塾大学教授	迫 桂
講師	東北学院大学准教授	杉山 和孝

英語学・英語教育部門（2階 講義室 254）

VP の構造と解釈

司会・講師	東北大学専門研究員	坂本 瑞生
講師	弘前大学助教	中島 崇法
講師	東北大学学術研究員	清水野 貴大

研 究 発 表

文 学 部 門

司会 岩手大学講師 中 谷 紘 子

「ヴァージニア・ウルフ『波』における形式の解体

東北大学大学院 佐藤 優里奈

本発表は、ヴァージニア・ウルフの代表的な実験作『波』における動詞“said”の反復に着目し、彼女が従来の小説形式を解体するに至った必然性とはどこにあったのかを解明する試みである。まず、作中に頻出する“said”という記号が、登場人物たちの流動的な内的独白に対し、語り手の介入と主観的な持続の切断を司る装置として機能していることを分析する。次に、本作がこのような断絶を伴う実験を行ったことで、抵抗したものについて考察する。ウルフの日記にも記された「冷酷な機械としての社会」への違和感は、主体の複雑な内面を社会的な記号へと翻訳し、単一の枠組みへ固定しようとする“said”の形式化を本作に強制したと言える。分析を通じ、本発表は『波』というテキストを、ウルフが既存の共通言語では語り得ない個人の痛みや喪失を、沈黙や不在といった形式を通じて表象しようと試みた痕跡として捉え直す。

司会 福島大学教授 高 田 英 和

Kazuo Ishiguro の *Klara and the Sun* における語りと世界観の特異性について

東北大学大学院 藤 原 史 織

本発表では、Kazuo Ishiguro の直近の長編 *Klara and the Sun* (2021) を対象に、語りの形式と作品世界の構築に注目して分析し、Ishiguro の社会的スタンスおよび現代における書く・読むというコミュニケーションの在り方を考察する。本作は、人間ではない存在の AF による一人称語りによって進行するが、この語りこそが Ishiguro 作品の中でも特異な、閉塞した世界観を形成している点を指摘する。さらに、Mark Fisher の提唱する「資本主義リアリズム」と本作の世界観を照合し、キャッチコピーと物語や世界観との齟齬を検討して、作品全体の試みを読み解く。ノーベル文学賞受賞後の Ishiguro に期待される役割と、作者自身が表明しようとするものとの緊張関係として本作を捉えることで、現代における創作・流通・読解というコミュニケーションの構造を明らかにすることを試みる。

壊れた信頼のあとで——*In Cold Blood* における声・応答・記憶

群馬パース大学准教授 徳 永 慎 也

In Cold Blood (1965) は、1959 年に Kansas 州 Holcomb で実際に起きた Clutter 一家殺害事件をもとにした、

Truman Capote の代表作である。本作は、Capote 作品における「声」という主題を、家庭や親密な関係を越えて、共同体や制度の次元にまで広げて示す作品である。本作で声を聴くことは、個人の内面を理解することにとどまらない。共同体が事件をどう受け止めるのか、文学がそれらをどのような配慮と責任を伴って読者へ届けるのかを考えることにもつながる。本発表では、Carol Gilligan の声の議論を参照し、声を、発話だけでなく、聴くこと・聴かれることを含む関係的な行為として捉える。そのうえで、ノンフィクション・ノヴェルという形式が、読者が出来事をあとから受け止め直す場をどのように作りうるのかを明らかにしたい。

司会 秋田大学名誉教授 佐々木 和貴

いつか、どこかの日本：

観光産業からみるアラン・ブース *The Roads to Sata* における「日本」表象

八戸工業高等専門学校教授 菊池 秋夫

「日本論・日本人論」は、日本が経済成長を遂げた 1970 年代から 1980 年代に feature されたトピックである。そうした議論の中で、アラン・ブース (Alan Booth, 1946-93) の業績は、十分な検証がなされてきたとはいえない。ブースは日本の地域表象の特徴として、発展した都市と峻別し、「ふる里」としてのイメージビルディングを鋭く指摘している。一方で、彼は都市に関しても、産業化、都市化の以外の面にも目を向けている点は注目に値する。当時の観光産業を視野に入れて検討すると、このようなブースの地域表象に込められた “regional identity” が明らかになる可能性があると思われる。本研究では、ブースの *The Roads to Sata* を彼の他の作品とも比較検討し、当時の観光産業における日本表象の文脈から、「日本」がもつ地域イメージの特殊性を明らかにしていきたい。

冷戦リベラリズムを巻き戻す——ホブソン、フォースター、トリリング

宮城学院女子大学准教授 酒井 祐輔

トリリング以来、イギリス社会の階級問題を扱った作品として論じられてきた『ハワーズ・エンド』について、近年の研究はリベラルの立場から社会改革を訴えた L.T. ホブハウスとの同時代性を指摘している。しかし、ホブハウスと並びニュー・リベラリズムの代表的論客と目された J.A. ホブソンは、先駆的な帝国主義批判を展開した人物でもあった。

本発表はホブソンの帝国主義論を補助線とし、『ハワーズ・エンド』を階級問題と帝国主義という二つの問題系が交差するテキストとして——あるいは、帝国主義をもって階級問題の解決とすることを唱えた社会帝国主義への批判として——読むことを試みる。

トリリングは、フォースターのリベラリズムの重要な側面を継承し損ねていたことになるが、これは冷戦という歴史的なプロセスのなかで起こったことと考えた方がよさそうである。以上を踏まえて、脱帝国の英語文学史を作っていくにはどうしたらよいのかを討議してみたい。

日本語否定一致表現における「文断片」の分析

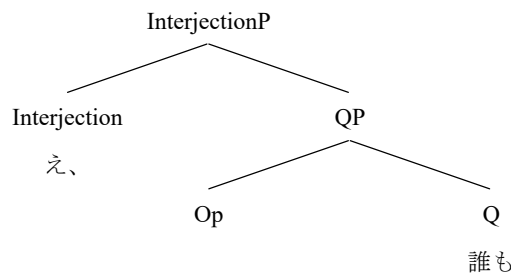
東北大学大学院 倉田 知温

本論では、言語的先行詞のない日本語 NCI (e.g., 「誰も」) の、所謂文断片の生起を論ずる。具体的には、次の例を容認する話者が存在する。

- (1) 文脈[太郎は、次郎、三郎、花子、凜と待ち合わせをしています。太郎はいつも待ち合わせ時間ギリギリに到着するので、友人が先に到着していることが多いです。太郎は今回も 1 分前に待ち合わせ場所につきましたが、他の人はいませんでした。太郎は次を言います:]
- %(?)え、誰も？

本論では、上記の例が、省略された文ではなく、(2) の構造を持つ非文発話 (non-sentential) であると提案する。

(2)



(2) では、解釈不可能素性が照合され、完全な統語対象として解釈される。また、Op は否定の意味を持つ演算子である。本研究の意義は、あまり論じられてこなかった、言語的先行詞のない NCI のデータを提出したことで、それに統語構造を与えたことである。また、Progovac (2006) の述べる、非文発話が、文より経済的な構造をもつという利点も維持している。

格与値によるボックス化

東北大学大学院 熊谷 陽希

Chomsky (2024) は、項の解釈位置と発音位置のずれを説明するために、一度命題領域に導入された項が、内的併合されることによって、「ボックス化」され、上位のフェイズ主要部からアクセスされて解釈されうるという「ボックス理論」を提案した。しかし、内的併合の適用を受けられる項が全て上位フェイズで解釈されうるかという、そうではない。補部に節をとる動詞のうち、*believe* によって選択される補部節は話題化の適用を受けられる一方、*remark* がとる補部節は話題化の適用を受けられない。この違いを説明するため、本発表では統

語部門中での格与値が上位フェイズでのアクセス可能性に関連していると考え、格与値にもとづいた新たなボックス理論を提案する。この提案によって節の話題化の可否を説明できるほか、二重目的語構文や同族目的語構文における *wh* 移動の可否についても説明できると主張する。

司会 東北大学准教授 中村 太一

心理動詞と Box 理論

福井大学講師 廣川 貴朗

アリゾナ大学客員研究員 菅野 悟

本発表では、Chomsky (2024) で提示された Box 理論のもと、心理動詞構文を論じ、経験者項は Box 化されると提案する。経験者項は逆行束縛などの特性を示すことが知られ、従来の研究では、LF で上位位置へ A 移動すると考えられていた (Landau 2010, Sato and Kishida 2009)。この特性を捉えるため、本発表では Box 理論を採用する。Chomsky (2024) では、*wh* 句・話題化句が Box 化され、C からアクセスさせることが論じられた。しかし、本発表では、経験者項も内的対併合を受けた後、vP 端位置で Box 化されると提案する。この結果、経験者項が C からのアクセス対象となる。さらに、van Urk (2015) に従い、従来の A/A' の区別は主要部が持つ素性の違いに還元できると仮定する。この仮定に従い、経験者項にアクセスするのは、C に存在する Point-of-View 素性であり、経験者項の A 特性は、この素性の存在に帰せられると論じる。また、本発表では、この Box 化の考えが、使役構文・二重目的語構文にも応用可能であると論じる。

関係副詞 *why* の疑問縮約

福島大学准教授 佐藤 元樹

本発表では、英語の関係副詞 *why* が導く関係節構造において、例外的に疑問縮約に類似した節省略が容認される現象を扱い、その統語的認可メカニズムを解明する。従来の省略の理論では、関係節の C⁰ は [-Q] 素性をもつために、E 素性が生起できず、節省略が認可されないとされてきた。これに対し本発表では、*why* 節内に *on earth* や *the hell* 等の強調表現が共起可能であるという経験的証拠に基づき、*why* 節が関係節でありながら、同時に、[+Q] 素性をもつ疑問節であることを論じる。この特性により、*why* 節の C⁰ は PF 削除を引き起こす E 素性を保持し、通常疑問縮約と全く同一のメカニズムで補部 TP の省略を認可できる。本分析は、既存の疑問縮約の認可条件を維持したまま *why* の例外的な省略を理論的に説明するものであり、疑問詞の持つ統語的・意味的特性と省略の認可メカニズムの関係性に新たな知見をもたらす。

SYMPOSIA

文 学 部 門

英米文学作品にみられる他者への共感

司会・講師

弘前大学准教授

土 屋 陽 子

講師

共立女子大学教授

浦 野 郁

講師

慶應義塾大学教授

迫 桂

講師

東北学院大学准教授

杉 山 和 孝

現代社会において、他者との関係性の希薄化や分断が指摘されるなか、「他者への共感」は重要な社会的・倫理的課題となっている。本シンポジウムでは、英米文学作品に描かれる他者理解のあり方に着目し、ケア、エイジング、結婚、共生等の表象を手がかりとして、文学が他者との関係性をいかに提示し、その倫理的・社会的意義を問い直してきたのかを考察する。特定の時代区分に限定されない幅広い作品を対象に、近代化社会への変容の中で、家族や共同体、あるいは非人間存在との関係において、他者理解やケアの在り方が、如何に構築または再構築されてきたのかを考えたい。英米文学の比較的視点も取り入れ、文学が人間の脆弱性や依存性を可視化する場として機能してきたことを確認しながら、現代社会における共感の意義について再考する機会とした。

イギリス小説に見る「他者への共感」の困難と可能性

浦 野 郁

迫 桂

近年、ケアの視点に立つ人文学研究が広く波及している。本発表では、ケアの諸相を再確認する目的で、**Age Studies** におけるケアの理解とそれにまつわる議論を概説する。さらに、これを参照枠としながら、ケアと共感について模索する二つの文学作品を読む。

E. M. Forster の *Howards End* (1910) では、主人公のシュレーゲル姉妹が下層中産階級の青年と知り合い、前時代的なチャリティ精神とは異なる個人的なケアや共感を通して彼の助けとなることを願う。しかしこれがかえって青年を追い詰めてゆくのはなぜか、慈善や福祉をめぐる当時の言説も参照しつつ考えてみたい。

Kazuo Ishiguro の *Klara and the Sun* (2021) は、AI が AF (Artificial Friend) として人間の子供のケアを担う近未来が舞台である。ポストヒューマニズムとエイジ・スタディーズの視点を接続し、本作品がケアの危うさを、時間的他者（異なる時間を生きる存在）と倫理的な関係性を築くことの難しさとして描いていることを示したい。

これら二つの具体例を通して、ケアや共感の視点が、どのような文学研究を可能にするか、そしていかなる問題を我々に提示するのか考えるきっかけとなることを期待する。

Dreiser, Wharton, Cather が描く結婚の形骸化：婚姻関係外に生まれる共感

土屋 陽子

19-20 世紀転換期の都市化・産業化の進展や女性の社会進出は、従来の結婚制度を揺るがし、男女の役割分担やその在り方を再編した。従来結婚は、相互ケアの制度とみなされてきたが、世紀転換期のアメリカ文学ではその機能はしばしば不全を示している。本発表では、Theodore Dreiser の *Jenny Gerhardt* (1910)、Edith Wharton の *The Custom of the Country* (1913)、Willa Cather の *Song of Lark* (1915) を取り上げ、世紀転換期アメリカ文学において、結婚が必ずしも相互ケアを前提とした制度として扱われていないことを指摘する。そのうえで、それぞれの作品にみられるケアの欠如、あるいは婚姻関係を越えた他者への共感に着目し、資本主義の進展とジェンダー秩序の変容が、結婚と家族の意味をいかに再編したかを考察したい。

亡霊性とエンパシー：

Richard Powers の Climate Fiction におけるテクノロジーの働き

杉山 和孝

Richard Powers の *The Overstory* (2018)、*Bewilderment* (2021)、*Playground* (2024) の間には物語上の連続性はないが、これらの作品において、Powers は一貫して人間、人間以外の生き物たち、そしてテクノロジーの entanglement をテーマ化している。本発表では、この三作品を通して変化するテクノロジーの役割に注目し、Powers がどのように人間と非人間を接続しているのかを分析する。それぞれの作品のテクノロジーの描写に注目すると、コンピュータープログラムが疑似的な生命体として描かれ、人間や人間以外の生き物と並列されていることが分かる。そしてコンピュータープログラムは、人間と人間以外の生き物を接続しつつ、人間をより大きな他者である「生そのもの」の中に位置づける。こうした存在論的な操作に擬人化を組み合わせることで、Powers は人間と人間以外の他者との憑在論的な共生関係を浮かび上がらせる。この亡霊性によって結ばれた関係性を通じて、Powers はマルチスピーシーズのエンパシーの可能性を提示している。

英語学・英語教育部門

VP の構造と解釈

司会・講師	東北大学専門研究員	坂本 瑞生
講師	弘前大学助教	中島 崇法
講師	東北大学学術研究員	清水野 貴大

生成統語論においては、述語が定める意味役割の階層が統語構造の格子 (e.g., D 構造) を定めるという考えが広く共有されてきており、その意味で VP がどのような構造を持つか、ということが重要な理論的位置を占めてきた。同時に、統語構造を専ら概念・意図インターフェースに最適化した計算機構と見る近年の極小主義の見解

を踏まえると、VP の構造という問題は、VP の解釈の問題とも密接に関与することが期待される。このような視座のもとで、項構造の交替（受動化、壁塗り交替、二重目的語、等）や述部にまつわる文法関係・文法的意味（アスペクト、副詞的修飾、等）などの現象が、VP をめぐる問題として一つの問題圏を成すことになる。以上の背景を踏まえ、本シンポジアでは、統語構造の核をなす VP 領域の構造と解釈に関わる具体的な言語現象として受動化、アスペクト解釈、副詞的修飾を取り上げ、それらを検討することを通して、統語構造構築と解釈にまつわる問題について経験的な見地から検討する機会としたい。

VP 階層と付加詞の配列

坂本 瑞生

畠山他(2021)は「雑に髪を赤く染めた」と「赤く雑に髪を染めた」のような例文のペアにおいて後者の容認性が下がるという観察を指摘し、この日本語の付加詞に見られる配列上の制限に対して「様態副詞は結果述語によって構成素統御（c 統御）されてはならない」という一般化を与えている。本発表は、この配列上の制限が、VP 領域の意味的な階層に応じて付加詞の基底生成位置が決まると考えることで適切に導かれると論じる。畠山他が提案する制約には、結果述語が音韻的に「重い」要素である場合に体系的な例外が認められるが、この例外は統語構造とは無縁の後統語的移動によって派生していると考えられることで問題なく捉えることができる。類似の議論が英語においても認められることを論じ、その議論に基づいて日英語の VP 構造の異同についても検討する。

受動化できない動詞に対する考察

中島 崇法

受動化はその規則性、生産性、単純性から、生成統辞論における移動現象の代表例の一つであり続けている。その一方で、受動化を拒む一群の動詞が存在することも知られている。しかしながら、これらの動詞が受動化を拒む理由について明示的かつ包括的な説明は必ずしも十分に与えられていない。特に、先行研究では受動化を拒む動詞が非対格構造を取る（すなわち、外項を投射しない）という点から説明を試みることがあるものの、受動化を拒む動詞の中には外項を取るものも存在するため、この説明では十分でない。このため本発表では、受動化を拒む一群の動詞を意味構造にしたがって分類するとともに、語彙意味論と統辞論とのインターフェースの観点からこの問題への解決を試みたい。

項の解釈と事象構造

清水野 貴大

動詞の意味表示に事象項を仮定する事象意味論の観点では、 θ 役割を担う項は、動詞が表す事象の参与者として解釈される (Parsons 1990)。しかし、事象と参与者との間にどのような関係を想定すべきか、また、項が常に事象の参与者として解釈されるのかは自明ではない。そこで本発表では、項として現れる名詞句の種類や解釈に応じて動詞句のアスペクト解釈が変化する事例等を考察し、項と事象との間に成立しうる関係を整理する。また、この試みを通じて、項構造や事象構造が、統語部門におけるどのような操作や構造的関係を反映するのかも検討したい。

秋田大学手形キャンパス（教育文化学部3号館）へのアクセス

徒歩：JR 秋田駅**東口**から徒歩約15分（約1.3 km）

バス：① JR 秋田駅前**西口バス乗り場**（12番）から「手形山大学病院線」で「**秋田大学前**」下車後 徒歩1分（乗車時間約7分）（*ただし、土曜日は本数が少ない）
② JR 秋田駅前**西口バス乗り場**（11番）または（12番）から「赤沼線」「太平線」「松崎団地線」「秋田温泉線」「仁別リゾート公園線」で「**手形山崎**」下車後 徒歩5分（乗車時間約5分）（*土曜日でもある程度の本数はあり）
※ 復路は、「秋田大学前」18:14 発（秋田駅西口行き）があります。

自家用車：秋田大学手形キャンパスの**正門**から入って**左折先**の駐車場が利用可（無料）

＜駐車場を利用される方へ＞

- ・当日は**駐車場西ゲート**を常時開放します。**正門から入ってすぐ左折**し、まっすぐ進んだ先に駐車場西ゲートがありますので、ゲートを通して直接駐車場内へ入場・駐車願います（守衛への確認は不要です）。満車等の場合は **インフォメーションセンター（総合案内）** へお立寄りいただき、守衛の指示に従って駐車して下さい。
- ・お帰りの際にゲートが閉じていても、車両が近づくと自動で開きます。ゲート手前で一時停止をお願いします。
- ・路上駐車や秋田大学以外の施設・敷地への無断駐車は絶対におやめ下さい。
- ・通行・駐車中の事故・盗難等の責任は一切負いかねますので十分お気をつけ下さい。

秋田大学手形キャンパスへの交通案内

■秋田駅西口から「バス」の場合（秋田中央交通）

⑫番から「手形山大学病院線」

※「秋田大学前」下車 徒歩1分

■秋田駅東口から「徒歩」の場合 ▶ 約15分（約1.3km）

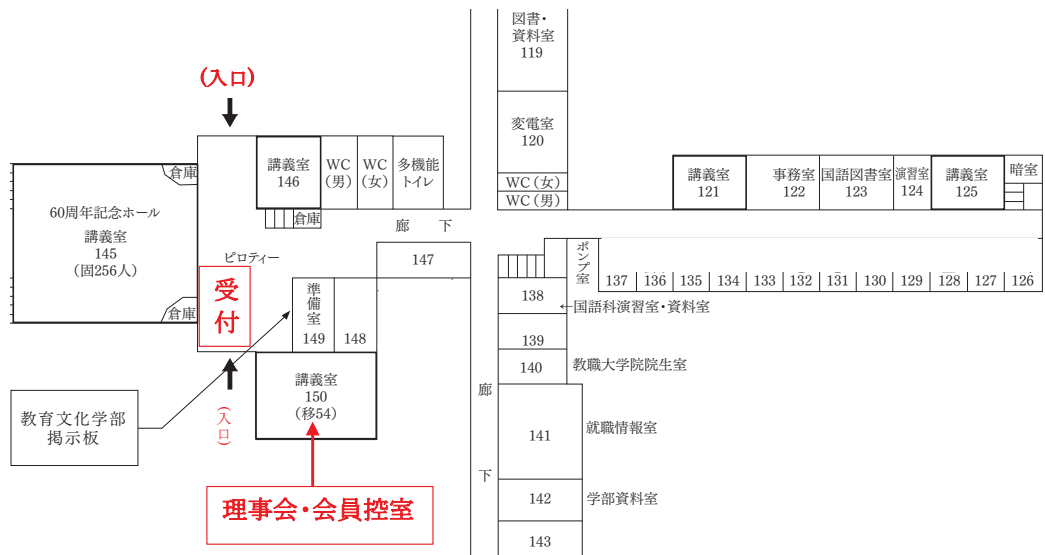


手形地区施設配置図

Tegata Campus Map



教育文化学部 3 号館 1 階（受付／会員控室）



教育文化学部 3 号館 2 階（研究発表・シンポジウム会場）

